

無上の功德 広大の利益

安藤 光慈 (あんどう こうじ)

中央仏教学院よりいただいた卓上カレンダーの二月の法語には、親鸞聖人の『一念多念文意』から、如来の本願を信じて一念するに、かならずもとめざるに無上の功德を得しめ、しらざるに広大の利益を得るなり（『註釈版聖典』685頁）

の文が引かれていました。「無上の功德」「広大の利益」とは、直前の文に

「為得大利」といふは、無上涅槃をさとるゆゑに、「則是具足無上功德」とものたまへるなり。

とありますから、「私たちが浄土に往生して仏のさとりを得ること」を示していることがわかります。

親鸞聖人の在世当時、いわゆる「一念多念の諍論」という論争がありました。簡単に言えば、私たちの往生は「一念」すなわち「一声の念仏」で定まるのか、それとも「多念」すなわち「念仏の相續」によって定まるのか、という問題について、互いに譲ることなく激しく争われていたのです。「念仏の相續」で往生が定まると主張する人は、本願文に「乃至十念」とあることによって、また「一声の念仏」で往生が定まると主張する人は、本願成就文に「乃至一念」とあることによって、それぞれ「一念という事は誤りだ」「多念は間違いだ」と相手を激しく非難しました。門弟の中にもその問題が及んだとき、「一念」も「多念」も誤りではなく、往生の得否は「信」の問題だということを示されたのが、親鸞聖人の『一念多念文意』というお書物です。

このような争いが激しく行われていたのは、私たちが往生成仏していくということが、この上なく大切な問題だったからに他なりません。まさしく往生し成仏するということが、私たちにとってまさに「無上の功德」であり「広大の利益」であったからなのです。

大正十四年に勸学寮において安心論題三十題が制定されたときには、この「一念多念」というテーマも取り上げられていましたが、昭和三十九年に出版された『安心論題綱要』で三十題から二十五題に減じられる中では、「一念多念」の論題も省かれることになりました。時代の流れ中で「一念多念」の問題は、それほど緊急性を持たないものになったのでしょうか。しかしながら、私たちが浄土に往生して仏のさとりを得るということが、「無上の功德」であり「広大の利益」であることは、七五〇回大遠忌を迎える今日においても変わることがないのではないのでしょうか。

私が浄土に往生し仏のさとりを得ていくこと、そのことが私の命に何を与えるのでしょうか。如来はどうして私に仏のさとりを得させようとしているのでしょうか。私という存在にとって、どうしてそれが「無上の功德」であり「広大の利益」なのでしょう。

仏のさとりを得るということは、私が智慧と慈悲の存在になるということです。慈悲とは、慈はいつくしむということですが、それは、相手のことを純粹に大切に思いやることです。悲とは、その人の悩みや悲しみを自らの悩みや悲しみとするということです。そして智慧は、そのことを可能ならしめる力でありはたらきです。また、智慧が縁起を知るはたらきであり、私という存在を成立させているものを知り通していくのであれば、縁となっているものもすべて無常の中に苦しみ悩む存在であることを受け止めていくのですから、それは当然慈悲へと展開していきます。仏のさとりを得るということは、その

ような智慧と慈悲の存在となって、苦しみ悩むすべてのものために生きるということなのです。

『大般涅槃經』には、五逆の罪を犯したために地獄に墮ちることを畏れた阿闍世が、釈尊のもとを尋ね、その教えをいただくうちに、人々の悩みや苦しみの心を破ることができたなら、自分は無間地獄に落ちて苦しんでもかまわないと決意する場面が描かれています。そしてそのエピソードが「信文類」には延々と引用されています。おそらく親鸞聖人は、五逆の罪を犯したことを畏れて苦しみ悩む阿闍世とは私自身の姿に他ならず、また阿闍世がたどり着いた決意には、私たちの命の意味や人生の意味が説かれているということを示しておられるのではないのでしょうか。

如来が私に仏のさとりを得させようとされるのは、そこに私の命の意味があるからなのです。しかし、『一念多念文意』の文に、「もとめざるに」「しらざるに」とあるように、自分自身にかけがえないはずのそのことを求めようとも知ろうともせず、身近にいる大切なもののために生きることもできずに、毎日を過ごしている私です。その私に如来の御本願は、おまえの命は浄土に往生し仏となる命なのだ、お念仏申す人生はその「無上の功德」「広大の利益」を得る道を歩む人生なのだということを示しておられるのです。親鸞聖人の七五〇回大遠忌は、私がそのことを知らせていただく御勝縁であろうかと思えます。

(司 教)